

JABT Newsletter

発行所 日本行動療法学会 〒300-31
茨城県新治郡桜村天王台1-1-1
筑波大学心身障害学系内
Tel. 0298-53-4716・4595
発行責任者 内山喜久雄
編集責任者 原野広太郎

日本行動療法学会第6回大会

日本行動療法学会第6回大会は、昭和55年11月8日(土)、9日(日)の2日間にわたり、群馬大学教養部にて開催されます。

個人研究発表、シンポジウム、特別講演(内山喜久雄 筑波大学教授)などが予定されております。多数参加されることを希望します。

なお、総会前の11月6日(木)、7日(金)の両日には、第4回行動療法研修会も開催のはこびとなりました。

第6回大会を開くに当って

日本行動療法学会第6回大会会長 木村 駿 (群馬大学教育学部)

1980年代はいささか国際的な波乱ぶくみで開幕した。80年代はひとつの転換期であり、価値の多様化の時代であるといわれている。

日本行動療法学会も今回で6回目の大会を迎え、わが国の行動療法もようやく各応用分野に定着しつつある。また一般の社会の人たちからも次第に関心を持たれはじめてきているようである。

わが国はアメリカやイギリスのように精神分析療法がひろく普及している状況ではない。したがって行動療法をめぐるの対決や論争もない。比較的各学派が共存し、相互の和を重んじ

る風土のせい、むしろこれを総合して独自の方法に仕上げるといふ風潮もある。

現代のテクノロジーの発達、行動療法を今日のように発達させたことは、まぎれもない事実である。しかしテクノロジーそのものに対する批判が、行動療法そのものにむけられていることはよく知られている。

このような状況に直面して、行動療法家がどのようにそれぞれの活動を展開してゆくか、このような方向づけのひとつの手がかりが今回の大会で得られ、ばたいへん喜ばしい。会員の皆様のご協力を切にお願いしたい。

第6回日本行動療法学会大会プログラム

会期：昭和55年11月8日(土)～9日(日)

場所：群馬大学教養部

第1日 10時～受付開始、11時～13時～編集委員会、常任理事会

13時～14時～特別講演「行動療法の沿革と展望」 内山喜久雄 筑波大学教授

14時10分～17時10分～一般演題 18時～20時～懇親会 (群馬ロイヤルホテル)

第2日 9時～12時～一般演題 12時～13時～理事会 13時～14時～会務総会

14時10分～17時～シンポジウム「行動療法の未来」

司会 木村 駿

シンポジスト：埼玉大 茨木俊夫

シンポジスト：筑波大 藤田 統

シンポジスト：高石クリニック 高石 昇

シンポジスト：自治医科大 滝沢 清人

第4回行動療法研修会

日時：昭和54年11月6日(木)、7日(金)

場所：群馬大学教育学部

(群馬県前橋市荒牧町1375)

☆今回は初心者のための基礎と応用についての
理論と実際について講習を行う

☆テーマとしては基礎理論、系統的脱感作技法、
自閉症児の行動療法、心身症とサイバネシス、
性機能不全の行動療法、精神科領域の力動的
脱感作法が予定されている。

☆講師は早稲田大 春木豊、埼玉大 茨木俊夫、
東海大 篁一誠、東京大 石川中、
防衛医大 赤木稔、柴田クリニック 柴田出

☆定員：50名

会費：10,000円

連絡先：〒113 東京都文京区弥生2-4-16

学会事務センタービル

日本学会事務センター

TEL 03-815-1903 (担当 森)

海外情報—第1回世界行動療法学会総会について

ご承知のように本年7月13~17日、イスラエルの首都エルサレムにおいて第1回世界行動療法学会が開催された。筆者は先に Advisory Committee の一人に挙げられており、又昨年12月サンフランシスコにおいて開催されたAABTの国際委員会で次回AABT会長Wilson博士およびEABTの国際委員の責任者の責任者である英国のBurns博士から、エルサレムでも国際委員会を開催するので成可くならば来て欲しいといわれてもいたので、JABT常任理事会にもはかった上で赴いた次第であった。

元来イスラエルは同国の政府が積極的に支援するという話を聞いているが、若干物騒な政情を背景としているにもかかわらず、かなり頻りに国際学会が開かれているようで、筆者の関係している範囲でも心身医学会、ME学会などの例があげられる。今回の開催にいたるまでには若干の経緯はあったように思われるが、もちろん詳しいことは筆者の関知するところではない。

いずれにしてもEysenck、Lovaas、Brenghelmann、Franks、Lang、Wolpe、Marks など錚々たる大家が顔を見せてヒルトンホテル隣のConvention Centerで5日間、その前後にも又会議期日中にもworkshopが設けられてなかなかの盛会であった。日本からは鹿大・金久教授の他に異常行動研究会の梅津耕作先生もライブチッヒの世界心理学会を終えて参加されており、毎日どこかで顔を合わせてお互いに情報を交換しあったりして、お蔭で気分的にもかなりリラックスすることができた。

筆者は“男子一卵性双生児の神経性食欲不振症の道具的条件づけによる治験例”を投稿しておいたところ、たまたま鹿大・金久教授もその教室の業績をまとめられた“神経性食欲不振症の行動療法”を発表されることになっており、同じシンポジウムで日本から2題の発表という

ことになっていた。このことは、司会の英国のRussell教授も触れられてたまたま独、米、日、英各国からの発表ということで嬉しく思うと挨拶された。筆者はかねて文献上では存じ上げていた米国のHalmi女史にシンポジウム以後何回か顔を合わせて面識を得たし、筆者のテーマも英文で発表することを奨められた。

世界学会は会場も7ヶ所に別かれていて、とても会議の全容をお伝えする能力は持ち合わせていない。しかし行動療法全体の傾向としてはCognitive Behavior TherapyあるいはBehavioral Medicineといった趨勢に関心が強く、より臨床的にまたbroadな方向へ動きつつあるように思われた。

国際委員会はopenでinformalな集いということであったが、実際にはほとんどが各国の代表という感じがした。国際委員会自体もまだ十分正式に認められた形ではなく、欧州と米国が中心になって成べく緊密な連絡を取り合いながら、すなわちEABTやAABTの総会と関連せしめては国際委員会を開き、世界的な交流、協力、相互の援助を強めてゆく。そのためにはAABT事務局内に連絡機関を持つなどの提案がなされた。

会議議事録はAABT代表という形で参加したLieberman博士がまとめて、帰国後間もなく送付されてきたので、その抄訳が行動療法学会に掲載される予定である。また国際委員会の各大陸のad hoc representativesとしては一応以下と人々とされた。

AABT - G. Terence Wilson, Ph.D.

EABT - John Boulogouris, M.D.

ASIA - Minoru Akagi, M.D.

OCEANIA - David Horne, Ph.D.

LATIN AMERICA - Miguel A. Escotet

赤木 稔(防衛医大)

■学会だより

第44回日本心理学会は8月27日から3日間北海道大学で開かれた。この学会は心理学の基礎領域の研究発表の多い学会であるが、その中でも特に行動療法に関係する分野のテーマをとりあげて紹介したい。

今回の大会の特色は36の分野にわたるトピックスごとに「ワークショップ」が持たれたことであろう。このワークショップの1つとして「行動療法」がとりあげられた。司会と進行を筑波大学の内山喜久雄教授がつとめられ、行動療法をめぐる様々な話題が3時間にわたって議論された。参加者は基礎領域で霊長類の言語訓練を行なっている心理学者や、社会的な場面での公衆衛生関係の領域で対ガン対策の一環として禁煙の問題に取り組んでいる心理学者、あるいは教育や福祉の面から行動療法を行なっている心

理学者と多彩である。

話題としては、技法上の問題や理論的な問題さらには心理職としての行動療法家の役割などをめぐってにぎやかな議論がくりひろげられた。

一方、発表会場では「行動・学習」の領域で基礎的な研究の報告が行われた。特にストレス性潰瘍をめぐる問題、有害事象のpredictabilityの問題や、オペラント技法の発展に関する報告、さらに観察学習やモデリングの技法の基礎となる理論的研究などの発表があり、活発な議論が行われた。

行動療法そのものについての研究発表は今回きわめて少なかったが、これは北海道・東北地区の行動療法家が少ないせいもあるかもしれない。しかし自閉児の行動療法をめぐる発表では多くの参会者からの関心が示されていた。

茨木俊夫(埼玉大学)

■事務局だより

ニューズレターでは毎号のように年会費納入のお願いをしております。皆様の協力を得ておりますが、益々の援助をお願い申し上げます(事務局担当者)。

常任理事会トピックス：World Congress of Behavior Therapy(行動療法世界大会)への参加問題については慎重に検討してきたが、赤木渉外委員長を通して、積極的姿勢でコンタクトをとることになっている。

群馬大学教養部(木村駿会長)で、第6回大会が11月8・9日に行われるが、来年度の第7回大会は九州大学精神神経科(中尾弘之会長)の内諾を得ている。

機関誌「行動療法研究」への投稿、大会への発表申込みなどがより積極的に行われることを期待している。 <文責 小林重雄>

■編集委員会より

日本行動療法学会の機関誌である「行動療法研究」は、原則として、年間2号が発行されることになっている。

発刊の当初は、学会大学の抄録か、シンポジウムの原稿が主体であったが、投稿原稿がふえ

るにつれて、原著を主体として、編集する様になった。

原著中心となると、投稿原稿が必ずしも多くないので、しばしば年間2回の発行が困難となり、昭和54年度は1号と2号の合併号とした(5巻)。

しかし、せっかく年2回の発行が可能であるのだから、是非、会員各位がふるって投稿されることを切望する。

以上、編集委員長として御願ひする次第である。(石川 中)

行動臨床心理学

内山喜久雄編著 A5判.320頁.3500円

自閉症 その治療教育システム

小林重雄著 A5判.260頁.3500円

行動主義と現象学

T.W.ワン編 村山正治編訳 A5判.300頁.4000円

子どもの精神療法

小倉清編著 岩田・瀬尾・中山・前川著 A5判.420頁.4500円

岩崎学術出版社 東京都文京区小日向1-4-8